

解題と翻刻

「天明二年寅三月 御葵使遣中上下ならびに逗留中日記 従四位下能登守保合」

梅辻 諄

「解題」

江戸時代の上賀茂神社（賀茂別雷神社 京都市北区上賀茂）では毎年、境内に自生する双葉葵を鉢に植えて江戸まで運び、四月朔日（旧暦）に徳川幕府へ献上する行事が行われていた。この「御葵使」はやはり京都から江戸に向かう「お茶番遣中」とともに恒例の行事として有名であった。この毎年の葵献上は慶長十五年（1610年）に、徳川家康の命令で駿府城に献上したのが始まりで、以後幕府の大政奉還（1868年）に至るまで連綿として続けられた。徳川幕府の武運長久と繁栄を祈るため、為政者に対する儀礼ではあるが、上賀茂神社にとっても、莫大な経済的な効果をもたらす大切な行事であった。

上賀茂神社の神紋である双葉葵（フタバアオイ ウマノスズクサ科）の模様は徳川氏の家紋である三つ葉葵のそれと似通っており、また、徳川氏の出た三河の国はかつて上賀茂神社の荘園があつて「賀茂県主族」が数多く移住した土地でもあつたので、徳川一族の守護神としての待遇を上賀茂神社に与えていたのであろう。

「御葵使」の正使は上賀茂神社の神主を除く杜司二十名の中から交代で一

名、副使は氏人百四十名のうちから一名を選び、それぞれに仲間一名と小者一名づつと先触一名が加わつて、合計七名の団体を構成した。天明二年の御葵使正使は松下陸奥守息久、副使は藤本能登守保合であり、この日記の筆者は保合であつた。

大量の献上品などの荷物は馬で運ばれ、正使と副使は輿で、仲間は馬に乗り、小者は徒歩でそれに従つた。旅行のスケジュールは幕府側の意向に完全に従つていたので、すべての関所はフリーパス、川や海の渡し場では土地の役人が立ち会つて世話をした。宿は大名並の本陣、またはそれに準じる毎年の定宿で、一行の到着に先立って先触が手配した。京都出発は三月十三日、東海道五十三次を経て江戸到着は同月二十四日、一般に東海道の京都江戸間の行程は十二日が普通だったので、この御葵使は途中の物見遊山もなく、ひたすらに急いだ十一日間の旅程であつた。

江戸に到着した御葵使一行は江戸本石町四丁目の定宿 富士屋長兵衛方の座敷を本拠と定め、翌二十五日は早速 幕府の寺社奉行所に江戸到着を届け、今年是将軍だけでなく世子にも葵献上をしたい旨を、京都西奉行所からの添書きとともに願ひ出た。かくて、二十九日、書面を以て四月朔日江戸城に登城し、御葵を献上するように申し渡された。

天明二年四月朔日、一行は江戸城に登城し、将軍（十代 家治）と世子（若君）（後に十一代 家慶）へ御葵を献上した。その後、白書院において将軍への御目見え（謁見）を仰せつけられ、数回も習礼（予行演習）の後、

二人は御座所へ参進、砂上に蹲踞した。「賀茂社人」との奏者番の披露があり、直ちに退出した。それが終わって、御老中・若年寄・御側用人・寺社奉行などの高官に御礼のために参上した。また、井伊掃部頭・保科肥後守・松平伊豫守にも御奠を進上した。

八日に再度、登城して、京都に帰ることを許可するとの沙汰と共に、檜の間で戸田因幡守から時服を受け取った。これは將軍家からの謝礼である。

江戸滞在の最後の十六日の午前中、江戸城に登城して巻数（神札）を献上した。將軍や世子は勿論、尾張大納言へも一緒に献上した。終わって下城。そして、御老中・若年寄・西丸御老中・若年寄・寺社奉行などへ行き、御礼を申し上げ、それぞれへ巻数を進上した。これで一行の公式行事はすべて完了したが、公式行事のない日は手分けして各大名の屋敷や富豪の許を尋ね、葵草や巻数を贈り、神社への寄付金を募った。この金額はかなり大量となり、その後行われる葵祭や競馬会の資金に充当された。

帰路は十六日午後江戸を出発、中仙道を経て、二十七日に帰着、やはり、十一日間の強行軍であった。夕刻は社家会所で行われた老若集会ですべてを報告した。

この日記内容の大半は、賀茂本社との連絡書翰、幕府当局への願書、幕府からの命令書および船川渡証文などが占めている。当時の幕府への事務手続きがいかに煩雑を極めていたかがよく分かる。また、幕府の宗教界に対する統制が極めて峻厳で、為政者に対する神職たちの卑屈なまでの従

順な態度には憐れみを感じるほどである。

この日記は平成二十五年に、上賀茂神社の旧社家である藤木宣久氏宅の古文書を整理中に偶然に見えられた。「御奠使」は毎年派遣されていたので、関係書類は数多く残されている筈であるが、現在は大半が失われて、数点が残るのみである。

明治四年に国家神道令により、古来「賀茂県主族」が奉斎してきた上賀茂神社は政府の神祇省の管轄に移され、神職たちは解散させられたが、その際に、古文書類の政府による没収と散逸をおそれ、神職たちは手分けをして古文書を預かり、各自の家に持ち帰り保存したとの言い伝えがある。「天明二年 御奠使道中上下並びに逗留中日記」もその時に藤木家が預かった一冊であろう。

「翻刻」

天明二年寅三月

御葬使道中上下 並びに逗留中日記

從四位下 能登守保合

十二日

一、式日寄会

会所 森顯披露会

當年葬使御兼頼可被成哉之事

陸奥守息久、能登守保合御兼頼也、兩人共不調法、

順番之儀故、御請之段申伸、

一、保合葬使御受申二付得御意者當年より者

若君様之茂御葬券數献上可被成哉心付候故得御意候事、

御日次御考可有之事、則被考候處、宝曆十三年葬使

丹波守博久、筑前守替俊、此時元文三年之例ヲ以東御役所

被窺候處、關東二而可窺由二而、則御副翰被成下、其例書左之通

一、「享保十年四月

公方様

若君様

右二様方御葬券數献上仕候」

「元文三年四月

公方様

大納言様

若君様

右三方様之御葬券數献上仕候」

右之通三月廿六日二相願候様見ユ、尤横折二而奉書

一、關東寺社御奉行二而被仰渡之留書如左、

「公方様

若君様之茂葬草券數

献上仕度旨相願候、願之通可

有献上候

三月朔日」

右之通於關東寺社御奉行二而被仰渡候旨相見ユ、

十三日

一、参社、昨日葬使御受申二付諸事如恒例無滞相勅候様御祈念申

奉願口状

「公方様之毎年四月於關東御葬券數献上仕候二付從

今年者、若君様之茂右之通献上仕度奉願候、去ル元久

三年三月朔日被仰渡、御副翰被成下、於關東、寺社御奉行

江差上候處、御本丸江一所二可差上旨被仰渡献上仕候、此度も先例之通献上仕度奉窺候以上、

上賀茂一社惣代

寅二月十三日

岡本下野守 印

林 大和守 印

御奉行所

奉窺口状

「公方様之毎年四月、於関東御墓奉敷献上仕候二付、從今年者

若君様之茂右之通献上仕度奉願候、宝曆十三年二月十五日 若君様

献上之儀、東御役所之奉窺候處、於関東御願可申上旨

被仰渡、御副翰被成下、於関東寺社御奉行之差出候處、御本丸え

一處二可差上旨被仰渡、献上仕候、此度茂先例之通、献上仕度

奉窺候以上

上賀茂一社惣代

三月十三日

岡本下野守 印

林 大和守 印

御奉行所

奉窺口状

「當社御祭御内陣御墓柱從當年

若君様之茂可奉差上哉奉窺候以上、

二月十三日

上賀茂一社惣代

岡本下野守 印

林 大和守 印

御奉行所

廿二日

陸奥守下野守出頭、西御役所二而證文方三浦小藤太出座、暫差控

候處被申、追付野村彦三郎被出、被申渡者此間被伺候関東献上

植葵今年より若君様之献上之儀、先格之通、右献上之用意

仕罷下り、於江戸表二御伺可申上、尤右御添翰可被下候間、例年船川

證文被相願候節、御添翰之儀も御添願可被致旨被申渡承知退下之由也、

一、新居御番所五味六郎左衛門之例之通、葬使兩人より御船之儀

頼之書状、並びに富士屋長左衛門、例年旅宿之儀申遣

尚なお 例年之通、三月十三日発足仕候儀二御座候、以上

「未得御意候得共、一筆啓上仕候、弥御堅勝可被成御勤役珍重

奉存候、然者今度御墓為献上、拙者共参府仕候、例年御船

拝借之儀奉願候、毎々御世話之御儀御座候得共、何分宜奉願候、

右得貴意度如此御座候 恐惶謹言、

二月廿二日

藤本能登守 保合 印

松下陸奥守 息久 印

五味六郎左衛門様

京都上賀茂御葵使

上書新居御番所

松下陸奥守

五味六郎左衛門様

藤本能登守

「二筆今啓達候、弥可為御無事珍重存候、然者今年御葵

為獻上拙者共罷下り候旅宿之儀、乍御世話頼存候、猶罷下り

万々可得御意候

恐惶謹言

二月廿二日

松下陸奥守

藤本能登守

富士屋長左衛門様

京都上賀茂

上書江戸本石町四丁目

松下陸奥守

富士屋長左衛門様

藤本能登守

右両通共 会所森頭江附之

廿八日

一、葵使文度料白銀五枚（但錢包水引熨斗添）来月会所

経覽之乃入魂処、今日被渡之、但来月二日参会披露

之上被渡事例也、併入魂も例也、并びに仲間小者両人与

三拾匁式包今日被渡之、則両人へ相渡シ候事、尤来月

相渡候処、勝手ニモ相成哉相渡候由申之事

三月小

朔日

一、朝飯後、御月番東御役所江、干時赤井越前守殿

船川渡之御證文為願葵使息久保合出頭、麻袴

奉願口状

「御葵為獻上江戸之参上仕候三付、道中所々船川渡之

御證文例年之通頂戴仕、来ル十三日発足仕度奉

存候、則御證文写差上申候以上

天明二年二月朔日

藤本能登守 印

松下陸奥守 印

御奉行所

御證文写如左 料紙本改横折上包奉書

「江戸え如例年從費茂

葵指上候彼社人持參罷下

候間路次中船川渡之所々

無滞様所肝煎者也

安永十子年三月十三日

出雲 印

從京都江戸迄

船川渡所々

年寄

肝煎

〔從今年

若君様え御葵献上之儀奉窺候処、於関東

御窺可申上旨被仰渡奉畏候、右二付御添翰之儀

奉願候以上

寅三月朔日

上賀茂惣代

藤本能登守 印

松下陸奥守 印

御奉行所

右持參先、於長場手札差出證文方え御達シ可伝旨申、夫より

御廊下え通ル处、境津惣五郎出座、船川渡御證文願書并びに

去年本紙写等差出シ候处、尤若君様献上之儀相添出候处、

一読之上、若君様献上之儀被相尋候故、答二先達而西御役所へ

相願候处、於関東御伺申上献上可仕旨被仰渡候御添翰之

儀今日御證文相願候節願出可差出旨被仰渡候、暫控候様二而追付

被出、御證文之儀御聞置下リ次第可得御意候、御添翰之儀ハ西御役

所掛リ候間、西御役所え被出旨也、夫より西御役所へ參上、證文方

三浦小藤太出座、被申候ハ何日頃発足之儀哉被相尋候故、来十三日

之由申上候、暫控候様被申、追付被出、御添翰之儀御聞届ケ

来十一日十二日両日之内可伺候様被申候二付、左候ハバ十一日二御伺

可出由申退下、夫より伝奏御奉行え例之通相届退下、尤御両所とも申

置也、御両家口状之覺、當月十三日為葵献上、江戸え

出府仕候、右二付御届ケ申上候、彼方御用等モ御座候ハバ被仰下

候様申候、右之通会所經覽へ申退下、尤御證文本紙御筆筒江入置候事

三日

一、沙汰人經古入来、上下、明後五日首途振舞之御触也

四日

一、東御役所證文方より已刻御召之由ニ付息久保合出頭、
證文方え申込候処、石崎藤三郎出座、船川渡御證文
被渡之、則受印形帳面ニ致し候事、夫より於帳場御禮
申上退下、夫より御所司西御役所等え船川渡御證文頂戴
御禮申上、夫より掛り證文方与力三家へも禮申退下、
右御證文会所え渡之、則立会御筆筒江納之置

御證文留如左

「江戸え如例年從賀茂

葵差上候彼社人持参

被下候間路次中船川渡之

所々無滞可肝煎者也

天明二寅

三月十三日

越中 御印

從京都江戸迄

船川渡之所々

年寄 肝煎

五日

一、首途振舞為時分触職中入来ニ付出席 着麻上下

神主保麗、先月月番 重殖、月番 切久、元保、陳頭

彭俊代 氏哲、雜掌 季榮、經堅、執筆 和清、森頭代御座役兼帶

清隆、經古、經覺、葵使 息久、保合

献立

焼き物 さわら、せんば、汁しいたけ、こまこま、膾 ふな、大根
煮物 やきとうふ、からし、飯、かうの物、御酒 数献、釜 生た
い、せうが、ひたし物 みつば

巡盃之後、神主より会所経覺納

一、献次第三方、土器二枚 三方松梅

神主より息久え、季榮より保合え、息久より季榮え、保合より神主え、

季榮より息久え、神主より保合え、息久より経堅え、保合より経堅え、

経堅より息久え、経堅より保合え、息久より神主え、保合より季榮え、

神主より会所経覺、季榮より経古え、納

右おわりニ退下

一、今日会所経覺より国栖紙式帖受取帳面調如左

道中駄賃帖

廿枚

道中旅籠帖

十枚

道中錢買帖

十枚

毎日私勘定帖

半紙四十枚

毎日私勘定帖

半紙四十枚

御葵使

(以上図二別紙)

八日

一、今日貴布禰社之參社、息久保合同道也、尤仲間小者兩人共召連朝夕認振舞候事、中飯者米為置木船二而多儀候事、尤家内勝手宜事、尤端奥共神酒獻進也

十日

一、 覚

銀四貫三百目

内

百二拾匁 先達而渡之

残ル銀四貫百八拾匁

金 六拾九匁三步

五拾九匁七分三厘

此代四貫百六拾六匁壹分七厘

残る銀拾三匁八分三厘

内

金壹歩 雜賀嘉藤次へ送之

二ツ割

金貳拾七匁

歩金 三拾壹切

銀 拾二匁八分三厘

壹分六匁九分貳厘五毛

右之通経覺より受取候也

十一日

一、朝飯後、御添翰為伺息久保合出頭、西御役所へ参上、證文方

申込処、野村彦三郎出座、則御添翰被相渡、受印願御帳ニ致候事、

先達而若君様之植葵献上伺書兩通被持出被申候者

宝曆之例者不宜候故、元文之例相用候間、可然被仰候故、

則宝曆之例書御辰申候間、右之段書留置之通可然

旨被申渡候、承知之旨申し、夫より帳場ニおいて御禮申上、夫より

東御役所於帳場御添翰頂戴御禮申上候事、夫より掛リ證文

方三家へ禮申之退下

一、御添翰上書如左

阿部備中守様

赤井越前守

戸田因幡守様

土屋伊予守

井上河内守様

安藤対馬守様

牧野 前守様

一、職中より先触、可令印形旨申来ル、文言如左

「公方様え如例年為御葵

献上明後十三日卯刻京都

令発足龜下候 船川渡之

所々并びに駄賃伝馬宅匹同人足

八人無滞様頼入存候以上

天明二年

松下陸奥守 印

寅二月十一日

藤本能登寺 印

表書

從京都江戸迄道中宿々問屋年寄肝

煎中

京都上賀茂

先触

大津迄五十分被申付為持遣也

尤職中沙汰也

持参物受取如左

一、錢 六貫文

一、銀 四貫二百文

一、御葵槽 壹荷 植曲物十五

一、雷守 拾福

一、摩利支天 拾幅

一、大麻 五拾壹束 献上式束

一、卷数 同断

一、船川渡御證文 壹通 箱入

一、白紅水引 三拾把

一、沢水引 五拾把

一、扇子 拾本入一箱 五本入壹箱 三本入貳箱 二本入七箱（明年

より八箱二相成事）

一、松煙 廿一箱（同十一箱受取）

一、白砂 貳袋

一、大鷹 五枚

一、大奉書 貳帖

一、小奉書 三帖

一、美濃紙 貳帖

一、国栖紙 貳帖

一、三尺手拭 貳箱

一、勤方帳 壹冊

一、勘定帳 壹冊

一、狩衣指貫 貳領

一、注進雜記 壹冊

外三墨 貳丁 筆 貳対 蠟燭 拾丁

一、乗物 葛籠 通荷 貳斗 明荷 貳

右之通受取兩人申合配分 但御證文ハ息久へ渡之、右仲間より小者二

而引之

一、今夕方通荷明荷とも夫々詰之

一、寄会触職中入来、葵使兩人出席麻上下

一、寄会了後、老若参会有之、披露云當年御葵使

陸奥守能登守殿下向、依之御持参物用意候間、尚御吟味

可有之旨也、則目錄執筆被読上之後、老若中より
御苦勞之旨挨拶有之、退散

十二日

一、早朝神酒献進、此席奉書書包麻頂戴之事

但今年経順故人故、格別二祓執行之上、麻被送之事
其儀是ハ乗物ノ天井二張之也

一、於評議所葵槽御座二而包了而濱屋六平絡之事へ

荷物包三来ル、了而次酒干鰯和布二而祝酒依例出之

一、未刻斗、職中三人入来、上下、路用銀持参、被渡之

但シ去ル十日内之受取、例之通祝酒出之、保合ハ上下也

吸い物 たい、三種釜 生ぶし かまぼこ、みつば、硯ぶた うなぎ

卵 ゆひし 鮎にひやし、ぬたに すし うど、生貝 セリの酢 外

ニまんじゅう、いろいろ、すし

一、為見舞暇乞入来之衆中へモ同様出之

一、入来仲間小者 留守居 市助 五郎太、七町年寄行事

庄屋等為嘉儀来ル

十三日晴

一、未明より為見舞、親族中入来、出立、朝飯献立

焼物 塩小鯛汁 鯛すまし、煮物 くしかい いも ふき くわい、
かうの物

其外為見立入来之衆中祝酒出之

一、從當所大津迄持出賃錢三貫文人足八人但し 其迄

肴貫四百文之处、段々相願候二付及相談二候处、京都人足為

聞合候、當所人足同様二申二付衆評之上、京都人足申付

候二付如此、並びに本馬肴匹五百五十文、酒手とも川ノ金蔵へ渡之

一、卯刻出立、評議所例之通

一、於大津、井伊掃部頭様御蔵屋敷二而御安否並びに留守居御蔵

役人等之扇子二本（片合添送る）並びに下役人等同二本入、仲間ヲ以

送之

一、申半刻、草津平伊屋彦右衛門方へ止宿、但定宿

藤屋今晩指支有之由二付如此、尤為見舞入来也

酒出候二付錢貳百文為茶代遣之

十四日曇

一、寅半刻、草津出立、申刻関諸升屋忠左衛門方へ止宿

但當駅二而火繩大老把調之、社中へ之出候、用止京者

木曾路屋如此、酒出候ニ付為茶代式百文遣之

十五日

一、関駅寅半刻ニ出立、神官拝所ニ而十式調献進、未刻迄

桑名定宿立花屋利兵衛方へ着、則利手向、即刻菓子ヲ出ス、

追而面会、例年之通（式本入老箱 片合添）為茶料錢三百文紙包水引

直ニ送之、此序船役人兩人え如例年扇子式本入式箱（片合添）

渡之、宜取斗可被與候様相頼、且明日御船之儀例年之通

万事宜頼存候旨申之、即刻船役人伝兵衛参上、例年之通

扇子頂戴仕難有御禮申可上由也、依之船之儀例之通取斗

可信候旨申候处、承知之旨也、並びに船役人権藏迄申候者、是迄同役

兩人之处老人増候間、扇子ヲ老人分頂戴仕度段申之、答に當年者

例年之通持参致候間、余慶も無之段申处、御尤ニ存候ニ而退ギ也

十六日 晴

一、桑名卯半刻出船、船場ニおいて船役人申候者、今年より同役

老人増候間、明年より老人分頂戴仕度段相願候ニ付答聞届置候間

明年より可遣申候由申之、難有奉存候由ニ而退ギ申候事、於

船中船頭え鳥目三百文船玉御酒料遣之、午刻斗

宮駅へ着、申半刻池鯉鮒駅尾張屋新五郎方へ止宿

酒出候ニ付為茶代式百文出之

十七日 晴 午刻過より雨下

一、卯刻池鯉鮒出立、申半刻吉田駅定宿升屋庄七

方止宿、今晚松平伊豆守殿御家老勝田清左衛門殿

西村次右衛門殿へ書状、並びに松煙老箱ツツ片合添、庄七へ例年

之通宜取斗被與候様頼遣ス、書状如左

酒出候ニ付為茶代式百文遣之

尚 新居御船之儀拝借仕忝仕合奉存候、今年も

御船之儀奉頼候以上

「二筆啓上仕候、先以各様御堅勝可被成御勤役

珍重奉存候、然者例年之通御蔭献上私とも

参府仕候、今日御當地へ着仕候、依之御尋得御意度如此

御座候、随而乍粒状松煙老箱ツツ進上之仕候、恐惶謹言

三月十七日

藤本能登守 保合 印

勝田清左衛門様

松下陸奥守 息久 印

西村次右衛門様

返書如左

「貴札致拜見候、弥御堅固被成旅行珍重之御事御座候

然者例年之通御葵為献上被成御出府ニ付願御紙面

随而一品被掛御意忝存候、右御報為可得貴意如此御座候 恐惶謹言

三月十七日

西村次右衛門

印

松下陸奥守様

勝田清左衛門

印

藤木能登守様

「

十八日 晴

一、卯刻吉田駅出立、午刻前荒井定宿和泉屋甚助方え

立寄、半旅籠申附、甚助諸事肝煎、此時五味氏え

金子入書状并びに船役人之扇子式本入箱（片合添）三尺手拭式箱

（奉書包 水引）此品々甚助江例年之通宜被斗可具候様相頼

午刻船乗、五味氏之書状如左

尚尚 東海道致上京候ハバ尚又御案内可仕候間、御船之儀

宜敷奉頼候、木曾路

「二筆啓上仕候弥御堅勝可被成御勤珍重奉存候、如例年之

私共為葵献上参府仕候、先達而得貴意之通、今日御船

相備之儀宜御取斗可被下候、随而乍輕少御釜料金子百疋

致進上之候、右得貴意度如此御座候 恐惶謹言

三月十八日

藤木能登守保合 判

五味六郎左衛門様

松下陸奥守息久 判

返書如左

「御手紙致拜見候、弥御堅固御旅行被成珍重奉存候

然者先達而茂被仰聞候通今日此表御通被成候ニ付船之儀

被仰聞致承知候、則船申附置候、且御釜代百疋被

掛御意、毎度被入御意御成忝奉存候、今日者相諸罷連候間

後刻御通行之節万々可得御意、猶又御用茂御座

候ハバ可仰聞候以上

五味六郎左衛門

判

三月十八日

松下陸奥守様

藤木能登守様

「

一、昼旅籠申附ル、尤半旅籠也、外ニ為茶代錢三百文遣之

一、年寄并びに勘助等より勝手ニ可越申来ニ付袴羽織着、先葵槽

を先立、兩人歩行ニ而御関所向、葵槽ヲ披て掛ふとん下

役人見改、五味氏被相話居、御船之儀一禮申之処

あの方よりも遙挨拶ニおおよ、兩人手札ヲ出候処、私相話候故

御名前存居申候事故、不及御手札由被申候ニ付諸事挨拶ニ

おおよび舟乗、尤於船中錢三百文船頭等へ遣之

午刻出船、午半刻舞坂え着、未半刻濱松駅小伊勢屋

太郎右衛門方ニ止宿

- 一、濱松ニ而賀茂大明神之參詣、本宮両脇ニ神之右ニ天王社片岡大明神、左ニ貴布禰大明神有之、尤小イセ屋より杜え十四五丁も有之

十九日 晴

- 一、寅半刻濱松出立、辰刻天竜川船渡、前後とも役人出候申半刻大井川渡、瀬八拾八文川也、川越八人ツツ出ル、前後にも役人出ル、申下刻嶋田駅新屋六右衛門方ニ止宿茶二袋出スニ付錢二百文遣之

廿日 曇

- 一、寅刻嶋田出立、巳刻斗阿治川四十五文川也、未刻江尻清水屋吟右衛門方へ止宿、夫より三保社え參詣獵船一艘借り網打候處、多々魚取申候、舟代二百文外ニ酒代百文遣之

- 一、酒出候ニ付茶代二百文遣之、夜分酒申付候ニ付式百文遣之

廿一日 雨下ル

- 一、卯刻江尻出立、辰刻斗奥津川廿四文川也、前後共

役人出ル、巳半刻斗富士川舟渡シ、前後共役人出ル、申半刻

斗沼津駅藤田屋金兵衛方ニ止宿、但例年三嶋止宿之處、

昨年駅不残焼候ニ付原宿迄開屋參り相談申候ニ付、沼津

駅藤田屋金兵衛方ニ止宿、酒相送り候ニ付為茶代式百文遣之

廿二日 午刻雨下ル

- 一、寅半刻沼津駅出立、午刻斗白井屋三郎右衛門方ニ而如例半旅籠申付、亭主より酒并びに箸五拾膳送り候故、為茶代三百文遣之、箱根御番所ニ而以権藏ヲ手形を出ス、可通由也、尤葵御番所之前ニ枝掛ながら改メも無之通ル、申半刻斗定宿小田原駅多葉屋与次兵衛方ニ止宿菓子酒出之ニ付為茶代式百文遣之、尤白井屋方ニ而袴羽織着シ候事

- 一、山川為祝儀、仲間小者江彦人ニ錢式百文ツツ遣之

廿三日 晴

- 一、卯半刻小田原出立、辰刻サカイ川十八文川也、步行渡し馬入川、船渡廿三日川留り、今辰刻より明キ申由、巳刻斗越戸塚止リ之處、宿無之由故、程ヶ谷江越、酉刻程ヶ谷駅

藤屋四郎兵衛方二止宿

廿四日

一、卯上刻程ヶ谷出立、午刻斗富士屋長左衛門座敷へ着
尤長左衛門京橋手前迄ノ手向ニ出ル、今日より藤七履置
日用に兼而藤七とか人置候事、品川より人足え為酒代
銭貳百文遣ス、馬方え同銭廿文遣ス

一、入夜山本右膳入来ニ付日用物相頼候事

一、入夜飛にし為見舞参上仕、例年之通御用被仰付

被下候様相願候事、尚明日積書持参候様申付候事

一、社中え注進状出ス、如左

(尚 宿先への書状御世話ながら御届ケ可被下候)

一筆啓上候、先以其御比御静謐次各様弥御堅勝可被成

御勤役珍重奉存候、然者御葵道中無別状、拙者共始召連

候者共迄無異儀、今二十四日午刻本石町四丁目富士屋長左右衛門

座敷へ着仕候、依之御注進申入候、宜様御演説奉頼候、

恐惶謹言

三月二十四日

富野信濃守様

藤本能登守保合 判

松下陸奥守息久 判

山本相模守様

上包 富野信濃守様

山本相模守様

松下陸奥守
藤本能登守

裏書 三月二十四日出 本七日切賃錢江戸払

江戸本石町四丁目富士屋長左右衛門座敷より

右書状之内え銘々宿元への書状認出也

右藤七ニ申付、飛脚屋へ為持参、十七屋孫兵衛出賃

百四十八文也

京都上賀茂

松下陸奥守

御葵使 藤本能登守

本石町四丁目富士屋長左右衛門座敷ニ罷在候

此名札本改の

婦志や

但御門ニ而出之候名札所書無之事

廿五日晴

一、寺社御奉行所月番牧野豊前守殿へ出頭、麻上下、兩人同伴、先仲間ヲ以、御門之手札為出、夫より於御玄關手札を出し、取次申云為御葵献上、兩人参府仕候段御届ヲ申、其上寺社御役人中へ御達シ可被下候旨申入処、例席え可通旨二付、別席え通候处、追付寺社役小野徳右衛門出座二付私共兩人為御葵献上参府仕候、尤昨夕方御当地着仕候間御届申上候、別紙例書差出并從當年若君様えも御葵献上仕度、依之於京都相願候处、於關東二相願候様則御添翰成シ被下候二付差出候处、一読之上、先例被相尋候二付、元文之例書差出候处、落手之上、当廿九日御窺可出旨被申、夫より寺社御奉行阿部備中守殿、戸田因幡守殿、井上河内守殿安藤對馬守殿等え参府之旨相届申シ口上同上、尤御門ニテ出候处名札所書無之

覺

二、例年四月朔日御葵

献上 御目見仕候

一、同月五日御暇被成下

横折

本改上包美濃紙

時服拝領仕候

一、同月十六日卷数

献上仕候

右之通御座候例年之通

被為仰付被下候様奉願候以上

京都上賀茂

松下陸奥守

藤本能登守

三月廿五日

一、若君様え之例書如左

覺

二、元文三年四月

公方様

大納言様

若君様

横折

本改上包美濃紙

右御三方様江御葵卷数

献上仕候

三月廿五日

松下陸奥守

藤木能登守

一、門札出シ候如左

「御葵使 旅宿

玄関二

松下陸奥守

藤木能登守」

廿六日 雨下

一、山本道仙、湯川一雲、並びに御玄関番清水孫次郎、持田只七等え金子百足ツ書状相添送之如左

「以手紙致啓上候、先以弥御堅勝可被成御勤珍重奉存候、然者例年之通御葵為獻上、拙者共参府仕候、猶登城之節

可然御指図可被下、随而方金百足致進上之候、右得貴意度如此御座候以上

三月廿六日

藤木能登守

松下陸奥守

山本道仙様

表包 山本道仙様

御葵使 京都上賀茂

金子入

松下陸奥守

藤木能登守」

但文言同様、并道仙へは昨年之通可然御指図と書之

御玄関番へは同前

一、木具屋成兵衛来ルニ付、如例年木具申付ル如左

一、上リ曲物 九

一、同 貳ツ居基 貳

一、同壹ツ居台 五

一、中上リ曲物 十卷

一、同臺

一、御上箱 貳

一、同台 貳

一、中上リ箱 四十五

一、同台 四十五

一、五本入台 壹

一、三本入台 壹

右之通申付ル、扇子基者今日二而茂其持参、其余者一兩日之内可令持参旨申渡、此時成兵衛云御用代之内金三両内備之儀相頼候、仍而今日三両渡之

廿七日晴

一、後藤縫殿助方へ行向、例年之通扇子五本入居台

右ハ社中より被下、同三本入居台是ハ葵使兩人より送ル、并掛リ

手代え貴嶺扇貳本片合添、是者兩人より送ル、取次ヲ以申入処

市原久左衛門出座、例年之通被下置忝由申之、仍而申入候者

御預ケ申置候辛櫃並びに笠籠一荷借用之儀申入、尚後刻

取三可遣申処、承知之由也、例年挾箱借用ニかよひし処、今年者

山本右膳方ニテ借用故、其儀不及候事

廿九日晴

一、牧野家え為御葵献上任テ（保合卷人）出頭、則小野氏え申入候處、出座二而切紙ヲ以被申渡候如左

「 松下陸奥

藤不能登

右明朔日六ツ半時

御城江可被罷出候

三月廿九日

」

右之通書付被相渡、尚明日随分無達候様可被相尋候段被申渡、并若君様献上之儀相尋候處、先例之通相心得候様被申渡候承知、退下

一、公坊様・若君様献上御葵曲物四ツ葵七本ツツ植、白砂をさねに、こけ少し加え候事、并井伊掃部頭様・保科肥後守様松平伊豫守様・井上河内守様等江屯曲物ツツ右同様拵置事

一、明日登城着用狩衣 小サ刀（但今年不替勝手宜敷也）

一、湯川一雲・山本道仙・清水孫次郎・持田只七等江明日登城之儀為知之書状如左

「以手紙得御意候、先以弥御堅勝可被成御勤珍重奉存候然者明朔日御葵献上仕リ候様被仰出候間、於御城御取

持奉頼候、右得御意度、如此御座候以上

三月廿九日

松下陸奥守

湯川一雲様

藤不能登守

「 」「
いづれも文書同様也

四月朔日 晴

一、卯上刻各支度、神酒献進（干釜 洗米三寸）、卯半刻行例先御葵辛櫃入テ、但献上四曲物台貳ツ、擔夫貳人、宰領

仲間老人「平右衛門麻上下」次息久 狩衣指貫淺キ、乗物四人、仲間七助小者三平、次保合同上、仲間權藏、小者雇人

如例年極楽橋二而下乗、夫より段々御門五ヶ所ヲ經、到于

御玄関、下座筵之上え辛櫃ヲ居、御葵ヲ出ス、四曲物台

仲間二為持登城（但權藏平右衛門 此時御玄関番被持且目錄之一札申）

兩人御玄関

御玄関詰之衆へ対京都上賀茂葵献上下申、于時可

通言被申聞、夫より奥え参進、大広間着座、此所迄葵仲間

持来二兩人之前二居置、仲間ら御玄関前退下、此時湯川一雲・

山本道仙被出、諸事及挨拶二追付坊主衆兩人被出、葵ヲ奥え

被持行、辰刻頃寺社御奉行兩人之前え書付ヲ以唯今習礼

始候間、廊下え可参進旨、依之直ニ参進、習礼二度了、大廊下ニ

控居、追付黒田中務大輔殿始兩三人於白書院御目見、葵

使兩人於同所御目見相濟、直ニ御玄關へ退下、

附 御目見次第、大廊下ニ御目見ノ次第ヲ立並居處、御

目附御指図ニ付繰上ゲ御前ニ參進、此方兩人一緒ニ

御前へ出蹲踞、此時御奏者衆賀茂社人ト披露

有之、右承リ直ニ退ク、夫より直様下城也、夫より御老中

松平周防守殿・田沼主殿頭殿・久世大和守殿・御側御用人

水野出羽守殿・前御老中松平伊賀守殿・酒井石見守殿

大田備後守殿・加納遠江守殿・米念丹波守殿

西丸御老中島居丹波守殿・同若年寄酒井飛騨守殿

井伊兵部小輔殿・寺社御奉行阿部備中守殿

戸田因幡守殿・井上河内守殿・安藤對馬守殿・牧野豊前守殿

右之通御禮參上、御月番牧野豊前守殿ニ而者小野徳右衛門

出座、御暇日限窺參上之儀相尋候處、六日ニ可被出旨被申渡候

今日之序例年之通奏進上之ケ所如左

一、御葵 一曲物 台居 井伊掃部頭殿

一、同 同 保科肥後守殿

一、同 同 井上河内守殿

右河内守殿ニ而其先獻上御目見被仰付候御禮申上、御玄關迄退キ

次ニ御葵持參例年通差上候旨申置退下、其名札如左

〔今日御葵獻上〕

御目見被仰付

京都上賀茂

難有仕合奉存候

松下陸奥守

御禮參上仕候

藤木能登守

一、御葵 一曲物 台居

松平伊豫守殿

卷数一箱

今日御役人中え松煙袴箱ツツ以上指箱相送ル、尤御玄關取次中え

相願置也、今日御四方え差上候葵者笠籠入、先え相廻し

置候、勝手宜敷也

松平伊豫守殿御役人如左

一、松煙 袴箱 鞍岡四郎右衛門殿

一、同断 沼野内蔵助殿

一、同断 鈴木百度殿

一、同断 関 善兵衛殿

一、同断 寺田彦市殿

一、同断 河瀬万助殿

一、同断 栗原理右衛門殿

一、同断 川村又左衛門殿

一、同断 林 孫右衛門殿

一、同断 永原格兵衛殿

一、帰宅早々献上相済候一社中え注進状出す事、并銘々宅へも出之

注進状如左

(尚々 毎々御世話ながら宿先へ此書状御遣し可被下旨奉頼候以上)

「以飛札啓上仕候、三月十八日御状廿七日相達し致拜見候、

先以御一社中御静謐之旨承知仕、恐悦奉存候、各様二も

弥御勇健可被成御勤役奉珍重候、然者今日如例年

御葵献上仕御目見被仰付、并若君様え茂

御同様献上仕、首尾能相済大悦仕候、乍慮外

御安意被下度奉存候、依之御注進乃可得貴意

如此御座候、宜御披露可被下様奉頼候、恐惶謹言

四月朔日

藤本能登守

富野信濃守様

松下陸奥守

山本相模守様

一

上書 京都上賀茂会所

葵使

富野信濃守様

松下陸奥守

山本相模守様

藤本能登守

表書 江戸本石町四丁目富士屋長左衛門座敷より

状賃江戸松

雇人之覚 人数ヲ書付、藤七え申付事如左

待 忝人 平右衛門 辛櫃担 貳人 小者 忝人 六尺 八人

笠籠持 忝人 以十三人、雇之内二而弁当持も相兼候事

二日晴

一、卷数不残出来之事

三日晴

一、今日卷数并葵寄進方江為進上已刻頃より保合忝人出頭

道案内相兼平右衛門、尤葵卷数人于笠籠寄進方如左

一、葵卷数

御玉ヶ池式部殿事

横瀬駿河守殿

一、卷数

柳原一袴表通

富田能登守殿

一、葵

駿河屋

長崎弥之介殿

一、卷数葵

水戸橋之内

赤井六兵衛殿

一、卷数

小川丁

伊藤伊豆守殿

一、葵卷数

水戸橋ノ内

赤井六兵衛殿

一、素札

小川いなり小路

久貝忠左衛門殿

一、葵卷数

井伊町小坂橋

今井丹波守殿

一、素札

飯田丁中坂上

木下直次郎殿

一、葵 四番丁

酒井左門殿

一、葵 六番丁

由良播磨守殿

一、卷数 赤坂御門下

三浦長門守殿

一、葵卷数 糺町三家屋

駒井左京殿

一、葵卷数 永田馬場

滝川左門殿

一、井上河内守様より御使御初尾金貳百足片合 居 取次中沢權藏
受取之、則受取書如左

覺

二金貳百足

右井上河内守様より御神納儘ニ落手仕候、尚帰京之

御社納可仕候以上

四月三日

松下陸奥守

藤木能登守

御使者御方之

四日晴

一、今日葵卷数为持遣シ候ケ所如左、使平左衛門、尤兩人
名札ヲ所持遣ス事

一、卷数 台添

飯田丁

虎屋誠江

一、同断 “

牛込坂丁稚屋敷

横井庄左衛門殿

一、同断

音羽丁

瀧川監物殿

一、扇子 貳本

片合添

牛込御門ノ内 坂 上池院殿

一、同断

小川町

吉田意安殿

右ニケ所手紙相添如左

「以手紙致啓上候、弥御堅勝可被成御勤珍重奉存候、然者
例年之通御葵為獻上、拙者共出府仕候、依之任

社例扇子貳本致進上之候、右為得貴意度如此御座候以上

四月四日

御葵使

藤木能登守

吉田意安様

松下陸奥守

一、坂 上池院えも文書同断略之

一、未刻頃、松平肥後守様より金五百足熨斗目録相添、井上兵馬より

書状如左

「以手紙致啓達候、此間者葵御持參被差出候ニ付如例年
目録之通金五百足被相送候間、則為持達シ候、已上

四月四日

井上兵馬

松下陸奥守様

藤木能登守様

返書如差

「御手紙拝見仕候、然者此間御葵持參差上候、依之
如例年金五百足被下置之難有仕合奉存候、尚參上
御禮可申上候得共、先御受之儀何分宜奉頼右貴答
迄如此御座候以上

四月四日

御葵使 藤本能登守

松下陸奥守

井上兵馬様

別紙使人え受取道如左

二 金子五百足

右儲二受取申候、為念如此御座候以上

四月四日

松下陸奥守内 藤井文藏

永嶺和平様

「

一、葵 台居

永久橋 水野要人殿

一、巻数 右保合持參之乍之

山本仙庵殿

右平右衛門為持遣ス也

五日 晴

一、武家両伝奏久我大納言通公・油小路前大納言降煎

此せつ御參府二付、今度葵使として両人參府仕候二付

竊御機嫌候事、尤御能二付御登城之由也、夫より息久
老人巻数为進上出頭、如左 麻上下

一、巻数 台添 霞関 有馬兵部大輔殿

一、素札 小石川春日番町 牧野内膳殿

一、同断 お茶の水 長沢温次郎殿

一、巻数 台添 神田明神下 建部内匠頭殿

一、巻数 同 同所 酒井大和守殿

一、昨年より松平下總守殿え葵差上候二付、今年も山本右膳殿方迄
為持遣候、昨年之通御取斗頼遣し候処、承知二而相達し

可申由也、葵者伊井家など同様二仕立進上之事

一、富田能登守殿より使者来ル如左

「今度御葵献上二付昨日者御出、委細御申置之趣令

承知入御念奉存候、右の御禮如此御座候 恐惶謹言

四月五日 明親 判

表々

藤本能登守様 各御中 明親 富田能登守」

息久にも同言同様略之

返書如左

「御状之趣拝見仕候、先以能登守様益御安康被成

御座奉賀候、然者昨日者如例年卷数持参致進上之
候処、被爲入御念御状之趣ニ奉存候、此段宜御披露
奉頼候恐惶謹言

四月五日

息久判

保合判

ハ富田能登守様

御用人衆中

表 松下陸奥守

藤本能登守

別紙 金百疋

添来如左

又々献上之儀宜奉頼候以上

「追々向量能成、各様弥御安全御逗留可成目出度
奉存候、此間者御来賀被仰置候而不得御意残念奉存候、無
御留守と奉存候、若し又々御序御座候ハバ御来賀御咄申度候
御帰京被成候ハバ御知人方えも宜被仰達可被下候

卯月五日

尚々 本文之趣何分御知人方様宜被仰達可被下候

ハ 陸奥守様

能登守様

能登守」

右返書時節双方認之

一、今日仲間小者ニ給銀相渡シ候事

一、五拾貳匁八分

内

三拾匁先達而渡之

残ル 貳拾貳匁八分渡之

右三月十三日より四月二十七日迄日数四十四日分 一日壹匁貳分ツ

一、四拾八匁九分

内

三拾匁先達而渡之

残ル 拾八匁九分渡之

小者 七助

三平

日数同上 四口合 八拾三匁四分

六日晴

一、今日御暇為伺息久壱人出頭、則小野氏出座、被申候者兼而

明七日御暇儀御沙汰有之候処、明日者御伝奏御暇ニ付

肥前守御掛合之儀有之候間、尚明日御伺御出可有之旨

被申退下

一、後藤縫殿助手代市原久左衛門へ生鯛壹折貳尾相送之、右者藤木

紀伊守殿より為見舞被送候ニ付、則相送ル也

一、卷数遣シケ所如左 使 平右衛門

一、葵卷數 台添 本店六日林丁 宮内内膳殿

一、卷數 同 向築地 奈須玄真殿

七日晴

一、卷數為進上保合老人出頭如左

一、卷數 麻布市兵衛丁 畠山沢与四郎殿

一、同 麻生大豆売上越前守殿子息 内藤安三郎殿

一、葵卷數 川口久助殿

一、卷數 江戸見坂下 朽木権三郎殿

一、同 藪小路 木下千勝殿

一、同 同所 朽木勤負殿

一、同 佐久間小路 朽木収左衛門殿

一、同 同所 一柳土佐守殿

一、御月番牧野家之保合老人出頭 御暇日限相伺候候、則

寺社役小野徳右衛門出座、書付ヲ以テ被申渡候事、書付如左

一 松下陸奥

藤本能登

右明八日五ツ時

御城江可被罷出候

四月七日

一、明八日登城候間、取持之儀御頼申入度由、湯川・山本・持田・清水
四家江以手紙申遣候事 文言相応也

八日晴

一、今日御暇拝領物ニ付卯半刻頃登城、兩人熨斗目麻上下、仲間

袴羽織、小者挟箱片等也、御玄関ニ而京都上賀茂御暇被

下候ニ付罷リ通り候旨断、直ニ蘇鉄之間中程ニ着座、時ニ山本氏

湯川氏挨拶ニ被出、山本氏次男之由ニ而被引合候事、午半刻斗

於檜ノ間、御月番戸田因幡守殿御対顔、此儀先兩人一緒ニ

脇さしをさしながら次の間之敷居迄参進、干時御暇拝領

物と被仰之上兩人共退リ、直ニ息久老人御側へ進ム、此時

戸田因幡守殿時服を取テ御渡シ、少シ下テ頂戴退下、次ニ

保合同様（熨斗目袷、羽二重袴）時服着直ニ道仙、一雲子息ニ相渡

候所、御玄関迄被持出、家来共へ被相渡候也、保合拝領物相済

直ニ兩人一緒ニ敷居之處へ参進、御禮終而退ク、下城、尤道仙

一雲并御玄関番兩人へ対十六日卷數献上之節、別ニ御案内

不申入候間、其段御心得可被下候旨及入魂ニ候事、夫より直ニ

御老中方・寺社奉行等へ御暇拝領物御禮ニ参上之事

其如朔日略之

名札如左

「今日御暇被成下時服

京都上賀茂

拝領仕難有仕合奉

松下陸奥守

存候右禮参上仕候

藤木能登守

一、此序會津御屋敷之此間被成下候目録之御禮ニ参上之事

一、松平下總守殿へ如例年素札相勤候事

一、加納遠江守殿・安藤対馬守殿ニ而ハ御玄関より相渡し素札相勤

一、御月番牧野家ニ而寺社役増山五平太出座也、兩人申云御暇拝領物

等相済候、御禮且卷数献上日限伺何日頃ニ可参哉相尋候処

十五日伺候様被申、且又若君様御元服被為有候由ニ付、卷数之儀ハ

大納言様と可相認哉相尋候処、随分其通ニ而可然旨也、京都

寺社御奉行より之御副翰御返翰御座候ハバ十六日卷数献上

相済直ニ出立致シ候間、其節ニ而も御渡し被下候様御願申

入候処、小野徳右衛門掛リ之事ニ候間、其段儘と可申入旨返答也

申刻斗旅宿へ帰ル

一、一社中江御暇拝領物等注進状如左

「一筆啓上仕候、先以御社中御静謐可有御座奉忝悦候、

次各様弥御堅勝御勤可被成こと、是又珍重奉存候、然者

今八日例年之通御暇被成下、時服拝領仕、万端都合

能例と不相替相勤難有仕合奉存候、乍慮外御安意

可被下候、尚十六日卷数献上仕リ、直ニ出立仕候覺悟に

御座候得バ、廿七日頃二者上京可仕候間、此段可然御沙汰奉

頼候、右注進為可得御意如此御座候、恐惶謹言

四月八日

松下陸奥守

藤木能登守

富野信濃守様

山本相模守様

京都上賀茂会所

御葵使

富野信濃守様

松下陸奥守

山本相模守様

藤木能登守

表ニ 江戸本石町四丁目より

一、松平伊豫守様用人中より切紙到来如左

「以手紙致啓上候、然者例年之通廉未之御酒

進候間、明九日四ツ時御越候様可得御意旨、伊豫守

表被申付候旨如此御座候以上

松平伊豫守様

鈴木百度

藤木能登守様

岡 善兵衛

返書如左

尚々 今日者登城ニ付御答及夜引候、此段御容赦被下度候

「御手紙拝見候、弥御安康可被成御努珍重奉存候、然者

如例年御酒被成下候ニ付、明九日四ツ時参上可仕旨被

仰付難有仕合奉存候、尚明日可仕候右御請之儀宜

奉頼候貴答と如此御座候以上

四月八日

松下陸奥守

鈴木百度様

藤木能登守

関 善兵衛様

「

一、一柳土佐守様より御直書如左

「二筆今啓達候、此間者御入来殊ニ御祓御持参過分
存候、多礼如此」恐惶謹言

四月八日

未英 花押書判

松下陸奥守様

藤木能登守様

一柳土佐守「

返書如左

「從土佐守様御書被成下謹而拝見仕候、益御勇健被成
御座奉恐悦候、右御請申上候間、御序之時可然御沙汰
奉頼候 恐惶謹言

四月九日

息入 判

保合 判

「一柳土佐守様

松下陸奥守

御用人中

藤木能登守「

九日晴

一、今日伊豫守様へ参上、已刻頃息入保合同道、麻上下、於御玄関

昨日御召ニ付参上仕候旨申处、通て候様被申ニ付例席へ

通处、御酒吸物等被下、奥田長兵衛挨拶ニ被出也、頂戴相済

候而御用人関善兵衛・栗原理右衛門被出、挨拶了而例年之通

御初尾・競馬料・兩人へも頂戴、了而於御玄関取次へ右之

御禮等申退下、頂戴如左

御初尾

金百疋

競馬料

金貳百疋

金貳百疋

兩人へ被下

今日之序、本庄伊勢守様へ参上、素札相勤候事

午半刻斗帰宅

一、後藤縫殿助手代市原久左衛門被参、此間者御金被下忝
奉存候、且風呂敷ニ包御当所様へ返上仕候旨仲間共迄

申置候而被帰候也

一、今日所々より御初尾銀来ル事

十日雨下 無事

十一日晴

一、卷数 台添

いちがい御門外 水野土佐守殿

一、同

品川札辻

久留嶋信濃守殿

右息久老人出頭之事

一、卷数 台添

富士屋長左衛門

一、同

浅川丈助

右者長左衛門へ頼遣ス事

一、同

品川

玄性院

右者仲間二名札相済為持遣ス

一、去月廿四日書狀四月二日相達シ其返書左之通

「去月廿四日出之書狀、当月二日二相達シ致拜見候、先以御社中

益御静謐御座候、然者御葵御道中無別狀御兩人始御家

来中ニモ御堅固ニ而、去ル廿四日富士屋長左衛門座敷へ御着之旨

致承知、定而御献上茂無滞相済候儀と奉存候、追付

御上京之砌万々可申承候、先者御答迄如此御座候、恐惶謹言

四月三日

岡本下野守経堅 判

林 大和守重殖 判

松下陸奥守様

藤木能登守様

右之書狀十一日二相達ス也

一、卷数

台添

権田原

安田岩之助殿

右者仲間為持遣ス也、尤兩人名札相添遣ス事

一、後藤手代市原久左衛門へ書狀ニ而例年之通葵槽大廻し之儀、

并辛櫃等例年之通御預ケ申度段申遣候处、両様共承知之旨

申来ル、大廻し代毫貫文也

十二日晴

一、所々より御初尾神納有之事

十三日

一、松平下総守様より之御目録、今日右膳・季鷹より相達ス、則受取書

右膳殿へ遣候事、尤黒田十郎本人より荒井左学殿へ被達セ候、左学殿

より右膳へ被達セ候ニ付、右膳より兩人へ被達セ候事

「以手紙今啓達候、弥御無知珍重存候、然者此間出府被申候

葵御使へ金貳百疋被相贈候間、乍御世話御届ケ可被下候以上

四月十日

荒井左学様

黒田十郎大夫

請取如左

一、御目錄

金貳百疋

右者松平下総守様へ御葵差上候二付、被下置忝頂戴仕候、御請之儀宜御取斗御頼申入候 以上

寅四月十三日

藤本能登守

山本右膳殿

松下陸奥守

一、御初穂白銀老包、駿河屋岡野孫一郎殿より神納、去ル朔日於御城二、兩人え被申候者、御葵御余慶御座候ハバ頂戴仕度候拙者殊外雷二こまり候故、雷除と致度候由、明年より永く頂戴も致度趣二付、若水之御頂戴も被成度候ハバ、御初穂御神納被下様致度候、尚立掃り、一同へも申聞候而、明年より可致進上旨答候処、左様致具候様被相頼候事、今年余慶有之候故少々送之、尤古き曲物植台二居遣ス事尤あら方より取ニ来事

十四日小雨午刻頃より大雨

一、処々より御初尾来ル事

十五日晴

一、後藤へ先達頼遣置候葵槽、今日為持遣処大廻し二而差少之可申旨也、代老貫文也、但葵槽者延二而包遣し候事

一、明日卷数献上為親、牧野豊前守様へ保合老人出頭

寺社役人小野徳右衛門出座、弥明日卷数献上可有之候且又京都寺社御奉行へ之御返翰御渡申入候間、可相達

旨被申渡候、承知仕候、尤明日卷数献上相済候而御玄閑迄御禮参上可仕候得共、雲草御目二不掛候、是迄毎々

参上仕頼御世話忝段一礼申、退下、

一、赤井越前守様

阿部備中守

土屋伊豫守様

戸田因幡守

井上河内守

安藤対馬守

牧野豊前守

一、板橋え先触遣候事、使 藤七

本紙 本改 表包 美濃紙

「公方様え如例年御葵献上御暇被成下

明十六日午刻令発足罷上り候間 船川渡

之所々并伝馬一疋同人足六人無滞様

頼入存候以上

御葵使

松下陸奥守

印

藤木能登守

印

寅 四月十五日

從江戸京都迄

間屋

年寄

肝煎中

一、佐久間勘ケ由方へ伝馬之儀申遣左之通

「公方様へ如例年従上賀茂

御葵献上御暇被成下、明十六日

已刻令発足上京候間、駄賃

伝馬一疋無滞様御越頼入存候以上

四月十五日

御葵使

松下陸奥守

印

藤木能登守

印

佐久間勘ケ由殿

「

一、井伊掃部頭様より御使者

手紙如左

「以書中得御意候、然者例年之通御出府葵御持参二付

金子百疋ツツ例年之通相送候、御受納可被成也、右之段

得御意度如此御座候以上

四月十五日

松下陸奥守様

藤木能登守様

桜田賄方

返書如左

「御手紙忝拝見仕候、弥御安康可被成御勤珍重奉存候、然者例年之通御目録頂戴仕、難有奉存候、御礼参上可仕候得共先御請之儀宜奉頼候、尤右御答如此御座候以上

四月十五日

桜田

松下陸奥守

御賄方中

藤木能登守

十六日

一、卯上刻登城、先辛櫃擔夫貳人、宰領老人袴羽織、次

兩人服沙麻上下、仲間袴羽織、小者等也、御玄関より巻数

台居兩人持参、蘇鉄ノ間ニ相控候処、坊主衆長尾專清

早速出会ニ而相渡候事、尤大納言様分も一所ニ蘇鉄

之間ニ而相渡也、畢而下城、夫より例年之通御老中、若

年寄・西丸御老中・若年寄・寺社御奉行等へ参上

巻数献上相済候御禮申上、且御老中若年寄ニ而者巻

数一箱ツツ差上候事、寺社御奉行へハ進上無之事、
尤御老中方若年寄方等朔日之处ニ見ル、名札如左

「今日巻数献上仕

京都上賀茂

難有奉存候、右御禮ニ

松下陸奥守

参上仕候、依例御當

藤不能登守

家様へも巻数差

上申候

」

「今日巻数献上仕

松下陸奥守

難有奉存候、右御禮

藤不能登守

参上仕候

」

大納言様同様也 巻数如左

公方様

「賀茂別雷皇太神宮御祈禱」

「賀茂別雷皇太神宮御祈禱」

一、御老中方寺社奉行等御禮相済 已刻過旅宿帰ル

一、辛檀預ケ、笠籠返済 平右衛門・藤七へ申付候事、旅宿あと仕舞
同人へ申付候事

一、午刻頃江戸出立、戸田川無事。申刻過大宮駅止宿

宿 角屋武左衛門

十七日晴 雨不定

一、寅半刻大官出立、酉刻過本庄駅止宿

宿 諸井伝五右衛門

十八日晴

一、卯上刻本庄駅出立、賀須川無事、申刻斗坂本駅止宿

此日葛川渡し前後役出ル、宿泉屋六右衛門

此日横川関所ニ而先仲間ヲ以名札ヲ出 唯今上京之段改兩人
袴羽織着用 目札ニも不及通ル事、其名札如左

京都上賀茂

御葵使

松下陸奥守

藤不能登守

十九日晴

一、卯上刻坂本駅出立、申半刻頃長窪駅止宿

此日ウスイ峠其難所也 宿 みどりや与左衛門

廿日

一、寅半刻過長窪駅出立、申刻過塩尻駅止宿

宿 山城屋三郎兵衛

廿一日晴

一、卯上刻塩尻出立、申刻斗福嶋関所 羽織袴兩人歩行

仲間二名札ヲ以葵献上相済、只今上京之旨申遣ス也

横川関所ニ同断、酉刻頃上ヶ松駅ニ止宿 宿白井屋幸助

廿二日晴

一、卯上刻上ヶ松出立、申下刻藤合駅止宿 宿伊礼屋勘藏

廿三日晴

一、寅半刻藤合駅出立、申下刻伏見駅止宿 宿柏屋半平

廿四日小雨巳刻斗より晴

一、卯刻伏見駅出立、申刻斗赤坂止宿 宿冢沼伊十郎

今日大田川、合渡川、クセド川等越、船渡し前後役人出ル

宿より酒送り候ニ付錢三百文為茶代遣ス

廿五日

一、寅刻赤坂駅出立、申下刻武佐駅ニ止宿 宿桔梗屋五郎助

今日多賀大明神江参詣、凡壹里斗有之、尤島居本之

駅之てむたくより左へ道有之

廿六日

一、卯刻武佐駅出立、未刻斗大津駅止宿 宿菊屋庄次郎

横瀬川船橋矢スタ川等也、さらい屋甚兵衛為見舞来ル

廿七日晴

一、卯刻大津駅出立、三ツ星屋ニ而休息、為見舞上総介殿

為随分下戸、山ノ彦兵衛人来也、夫より御役所ニ参上、先神

泉瀧門内茶店ニ而麻上下着用、東御役所ニ参上、

證文方え申込候处、塩津惣五郎出座、兩人云先達而船

川渡御證文頂戴、関東下向、御葵献上例年之通

御目見被仰付、時服頂戴、首尾能相済、只今

上京仕候、右御禮御届ケ申上段申込候处、則申上候間暫可

相控旨也、追付被出、越前守へ申聞候处、御承知之段被申渡候也

夫より西御役所へ参上、例年之通於帳場同様御禮御届

申上候、別ニ證文方へ申込候处、三浦小藤太出座、兩人云

當年公方様へ御葵献上参府仕候ニ付、若君様へ茂献上

仕度段御願申上候処、御添翰被成下、於關東二御願申上候

処、同様二献上之儀被仰付、則寺社奉行所より御返翰

御届申上候段申之、並びに先例之通若君様へ願之通

献上相済候段、御禮御届書一通差出候処可申上旨也

追付被出、申上候御返翰御落手之旨被申渡候也 如左

御届ケ申上口上書

「大納言様へ葵献上之儀奉願候御添翰被下

置候二付惣代持参罷下候、寺社御奉行所御月番牧野

豊前守様へ奉差上候処、献上可仕旨早速被

仰付、當月朔日於御本丸、一緒二献上仕、例年之通

首尾能御目見仕、只今上京仕候、依之御禮御届

申上候以上

上賀茂一社惣代

天明二年寅四月廿七日

松下陸奥守 判

藤本能登守 判

御奉行所

一、夫より御所司へ参上、船川御證文下向之処、例年之通

御葵献上御目見時服拝領御禮申上候、夫より

伝奏御奉行所へ参上、關東へ葵献上、先達而下向仕候処

只今上着仕候、仍而御届申上候段申入退去、出町辺二而兩人羽織袴

二改候事、未刻帰心式日参會半二付帰家、追付兩人麻上下

着用、出席、演説如左

一、去ル十三日出立、於天津彦根御藏屋敷へ参上、御安否並びに御留

守居御藏役人並びに下役人等へ例年之通音物送し二留守居答二

不相替御音物預り忝由也、十五日桑名立屯屋利兵衛方へ着之上

船役人並びに利兵衛へ音物送之、船役人参上一礼申之、是迄

船役人兩人有之候処、今年より老人増候間、今老人分頂戴

仕度段相願候処、今年之儀ハ餘慶無之候間、尚明年より者

如何様共取斗可申由答候処、左候ハバ明年より三人分頂戴仕度

旨相願候事、十八日荒井二而松平伊豆守様家老中並びに

五味六郎左衛門へ例之通音物送之、尤例年之通御馳走

船出ル、廿四日江戸富士屋長左衛門方へ着、廿五日寺社御奉行

御月番牧野豊前守様へ参上、昨夕方着府之届ケ並びに

例書持参、寺社役人中へ申込候処、例席へ可通旨二付

則別席へ罷通候処、寺社役人小野徳右衛門出座二付、例書

相渡シ、並びに今年より若君様へ献上之儀、京都寺社御奉行江

相願候処、於關東相願可然由二而、則御添翰被成下候旨二付

差出候処、一読之上、先例無之哉被相尋候二付、元文之例書

差出候処、尚廿九日為龜可罷出旨被申渡候、夫より寺社御奉行所

不残着府之届ケ申上ル、夫より松平伊豫守様へ参上、例年

之通り扇子進上、御家老中已下松煙相送ル、廿九日

牧野豊前守様え為鑑参上之处、小野徳右衛門出座二而

以書付明朔日卯半刻随分入意獻上可有之候、尤

若君様へ茂同様御本丸え獻上可有之旨被申渡候、四月朔日

卯刻登城、如例年之獻上、於御白書院兩人一緒に

御目見被仰付、相濟而、御老中・御側御用人若御

御老中・寺社御奉行等え御札申上ル、牧野豊前守様二而

小野徳右衛門出座、御暇之儀鑑候处、六日二可参旨也、

此日井伊掃部頭様・保科肥後守様・松平伊豫守様・井上河内守様

等え葵進上、五日寄進方え葵葵敷進上、此序、武家伝

奏此節御出府二付為御機嫌鑑参上之事、六日 牧野

豊前守様へ参上之处、小野徳左衛門出座、明七日二可参由也

七日牧野家へ為鑑参上、小野氏出座、以書付明八日五ツ時登

城之儀被申渡候、八日卯半刻登城如例年之於

檜間二御月番戸田因幡守様御座、御服拝領物被仰付

夫より御老中己下御札申上候、尤逗留中追々寄進方へ

葵葵敷進上、御初尾到来之方者別紙書付候、松平

伊豫守様え被召、例年之通御酒被下、並びに御目録被下之、

井伊掃部頭様・保科肥後守様・松平下総守様等より例年之通

兩人へ御目録被下之候、十五日牧野家へ参上、小野氏出座二而

明十六日葵敷献上仕候故申入候处、随分入意獻上可有之旨

被申候、十六日早朝葵敷献上三付登城候处、坊主衆

長尾専齋被讀取、夫より御老中己下葵敷例年之通

進上、寺社御奉行中え者右献上相濟候、御禮御届ケ

並びに今日出立之旨御届ケ申上ル、相済上江戸出立、今日上京

則御所司・両御役所御禮御届ケ申上、並びに伝奏御奉行

え上着之御届ケ申上、先刻帰郷之段申之、

一 老若参會之席二而者右之演説あら方申述候事、畢而退去。保合 判

一、金二百足 競馬料 松平伊豫守殿

一、同百足 右御同人

一、同二百足 井上河内守殿

一、同百足 競馬料 酒井越前守殿

一、同百足 富田能登守殿

一、同百足 畠山次郎四郎殿

一、同百足 瀧川左門殿

一、同百足 朽木權佐殿

一、銀壹包 長崎弥之助殿

一、同壹包 岡野孫一郎殿

一、同貳包 丑寅兩年分 水野要人殿

一、同三包 子丑寅三年分 川口久助殿

一、錢三百文	朽木五郎左衛門殿
一、同二百文	横井庄左衛門殿
一、同二百文	酒井鉄藏殿
一、金百疋	玄性院
一、銀壹包	山本右膳
一、同拾貳匁	山本仙度
一、同貳包 丑寅兩年分	浅川文助殿
一、同壹包	富士屋長左衛門
一、金百疋	水野対馬守殿

右之分別紙以書付差出候事